

新

# 光学天文連絡会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

## 会報

No. 57

1990-06-25

光学天文連絡会事務局  
(一橋大学地学研究室)

6月7日 JNL T 設置調査費予算成立

# 目次

I. 第57回光天連運営委員会(新旧合同)報告	2
II. 第13回光天連総会報告	3
1989年度会務報告	6
1989年度会計報告	7
JNL T計画進捗状況	8
1990年度活動方針	9
III. 第58回光天連運営委員会報告	10
国立天文台専門委員等推薦候補者選挙結果	12
データ解析ワーキンググループ活動計画	13
将来計画に関するメモ	14
IV. 岡山・堂平観測プログラム小委員会よりの報告	15
V. 第6回理論・共通専門委員会議事メモ	16
VI. OSD Aについて	小平桂一 17
VII. HSTアーカイバルデータセンターについて-国立天文台の現況-	21
VIII. JNL T観測装置プレワークショップ報告	22
IX. 国立天文台内望遠鏡WG会合記録(13)	23
X. 会員異動	24
掲示板	
会費納入のお願い	1
「第1回光・赤外ユーザズミーティング」のお知らせ	12
「JNL T運用体制とOSD Aの検討会」のお知らせ	18

## 会費納入のお願い

1990年度分会費(一般2千円、学生千円)を同封の振替用紙にて  
納入方よろしくお願ひします。

もし、既にお支払頂いた方に振替用紙が届きましたら、失礼をお  
詫びします。

光学天文連絡会 事務局 会計

## I. 第57回光天連運営委員会（新旧合同）報告

日時 : 1990年5月8日 午後6時-8時半  
場所 : 京大会館105号室  
出席者 : 家、磯部、市川(隆)、岡村、海部、小暮、小平、定金、谷口、浜部、平田、舞原、若松

議題 :

総会提出議題の確認 (本会報の総会報告資料参照)

新運営委員長に舞原氏選任

1990年度活動方針の策定 (本会報p.9参照)

今年度のワーキンググループ

観測装置WG (世話人 舞原)

JNL T計画の遂行の中で、特に観測機器の開発体制を確立していくことが重要になってきたので、これまでの望遠鏡WGに代えて観測装置WGを置く。

データ解析WG (世話人 市川隆)

データ解析システムの将来計画の立案を開始する。また昨年度までに残された課題について、IRAF担当者会と協力して取り組んでいく。

それぞれメンバーについては次回の運営委員会までに決定する。

国立天文台委員等の推薦のための選挙について

国立天文台への推薦の日程から6月上旬には決定していなければならないので選挙公示は5月15日付けで発送することとなった。

ユーザーミーティング(UM)を8月20日の週に行う(世話人代表 市川(隆))

今年から、シュミットシンポジウムと岡山・堂平UMを合同して、光・赤外UMとして開催することになった。

光天連関連のシンポジウムの世話人と日程

JNL T観測装置シンポジウム (世話人 舞原、海部)

11月上旬、その前に1~2度準備会をもつ。

銀河観測による宇宙論(世話人 市川(隆)、市川(伸)、梅村)

1991年3月中旬

次回運営委員会の日程を6月2日に決定

議題 運協、専門委員推薦人の決定、WGの方針、メンバーの決定他

議論 :

運営委員会とワーキンググループの関係について

本来運営委員会で議論すべき課題についてもWGに検討を依頼することが多かったことに対する反省があった。今年から運営委員の数を減らすことによって身軽な運営委員会となったので、以前より頻りに運営委員会を開くことになった。約2カ月毎に運営委員会を開き、1~2度は2日間にわたって十分に議論を深める。そして体制WGやユーザーズコミッティは今年度は置かず、運営委員会がにおいて十分問題点を深める議論を行う。

さらに、日本における光・赤外線研究の発展のために、JNL Tの運用体制、大学院教育(総合研究大学院構想と併任方式)、京都大学の望遠鏡計画、地方大学の役割、国内の観測体制など総合的な展望を画策していく必要がある。

運営委員選挙細則の検討について

選挙でかならず新人が3人は入るようにする、運営委員長の任期を最長3年とし、3年目には副委員長を置くなどの検討が必要であるという提案があった。その必要性に異論はなかったが、選挙細則を変更したばかりであるので、少なくとも新しい選挙細則で2回以上は選挙をするべきだということで、この問題については議論を深めて行くことになった。

OSDAについて

会報No.56にある能丸氏の指摘に対する返事は、小平委員が次号の会報に掲載する

## II. 第13回光天連総会報告

日時 : 5月9日(水) 18時半~20時

場所 : 京大会館A会場

出席者 : 53名

司会 : 谷口義明

### 1. 運営委員選挙細則改定の追認

小暮運営委員長から、「JNL Tの推進のみならず、21世紀の光・赤外線天文学の将来計画を立案・推進する等の重要な課題が光天連に与えられていることを鑑み、より活力のある運営体制を実現するために運営委員の選挙方法を改定した(会報No55, p.1)」旨の報告があり、拍手をもって承認された。

つづいて、濱部事務局長から1990年度運営委員選挙の結果(会報No.56, p.2)報告があり、承認された。

### 2. 1989年度報告

a)活動報告 小暮運営委員長

活動報告(会報No.56, p6-7)の概要説明。

b)会務報告 濱部事務局長

(別掲)

c)会計報告 濱部事務局長

(別掲)

d)各ワーキンググループ報告

体制WG 関 (会報No.56, p11)

望遠鏡WG 舞原 (会報No.56, p10)

データ解析WG 平田 (会報No.56, 18-19)

ユーザーズコミッティ 谷口 (会報No.56, p12)

e)JNL Tの進行状況 (家)

(別掲)

(小平)7.5mの口径が決められた背景と現在の世界の状況を鑑み、JNL Tの口径を8mにする可能性について検討を始めた。概算要求の時期の兼ね合いから数カ月以内に決定する必要がある。焦点距離を同じにしたいので、口径比が明るくなり、視野は少し狭くなる(24分角)

### 3. 1990年度光学天文連絡会の体制

以下のように、運営委員会案が了承された。

a)運営委員会

委員長 舞原俊憲

委員 小平桂一、市川 隆、谷口義明、渡部潤一、岡村定矩、海部宣男、若松謙一、平田龍幸、家 正則

#### b)事務局

事務局 一橋大学地学研究室  
事務局長 市川 隆 (一橋大学)  
庶務 水野孝男 (東京学芸大学)  
会計 小倉勝男 (國學院大学)

#### c)ワーキンググループ

観測装置WG 世話人 舞原俊憲  
データ解析WG 世話人 市川 隆

活動計画案、メンバーについては次回の運営委員会(6月2日)に決定する。

#### 4. 1990年度活動方針 (舞原新運営委員長)

別掲の活動方針案が運営委員会から提案され、了承された。

今年度WGの数が少ないのは、これまでの体制WGやユーザーズコミッティの役割を運営委員会が担うことによる。

(小暮)今までの運営委員会では重要な課題までもWGに検討をまかせることが多かったが、新運営委員会は人数も少なく、身軽になったので、十分な討論が可能になる。新運営委員会の活発な活動を期待する。

#### 5. 国立天文台運営協議員、各種専門委員候補の推薦方法について

会報No.56,p5にある案について小暮運営委員長から説明があった。

JNL T委員も選挙に含める必要があるとの指摘に基づき、付け加えることとなった。(選挙公示は5月15日付けで、全光天連会員に発送した...事務局)

#### 6. 国際学術研究について(磯部)

平成3年度の国際学術研究の応募についてアンケート調査を行ったが、分野や使用予定の望遠鏡が多岐にわたり、観測予定者数も数が多いことが判明したので、5-6名程のいくつかのグループに分け、それぞれで調整して応募することになった。平成4年度の応募方法については、新しい運営委員会の検討に期待する。

#### 7. 国立天文台の大学院教育体制 (小平)

国立天文台としては各大学から大学院客員講座の概算要求を出してもらうようお願いするとともに、一方で総合研究大学院構想を進めていく。早くて平成4年度に最初の概算要求をする。背景には国立天文台内部に研究者の育成・指導をしていく体制が先細りになっていく危機感がある。文部省での総合研究大学院構想が一段落した時期にあるので、各大学の努力で概算要求を出してもらうことを期待している。

(小暮)天文研連では作業グループ(田原、内田、小暮)によって、それぞれの方式のメリットを検討しており、相補的に併立できるような案を準備中である。併任制を考えている大学は東大、名大、東北大、京大などがある。

#### 8. その他 (小平)

##### UH2.2m望遠鏡

D.Hall氏はDirectorとして、JNL Tの人材を育てることに協力する立場で観測時間の10%程を日本側に与えたい意向である。一方で、運用費、消耗費、オペレータ費、Support Scientist、計算機施設費を負担して欲しい(2千万円/年程度)との希望を持っている。ただしOSDAには含めない。

日本側としては運用費を確保したいが、できない場合でも10%の観測時間の維持はお願いしていく。

##### OSDAについて

(本会報の記事参照)

#### 9. 討論

##### 広報活動について

\*JNL T計画の周辺分野への広報活動、海外での研究発表等が少ない  
個人的なレベルでどの努力や英文パンフを海外に配布するなどを行っていく必要がある。

\*7月のIAU Regional MeetingでのPR活動が重要。

\*会報が少ない。(何とか増やして行きたい...事務局)

\*e-mailでどこかに黒板のようなものを作って情報交換したい。(IRAF管理者会に検討をお願いする。)

##### JNL T観測装置開発体制について

\*JNL T計画の一部であるにも関わらず、立ち遅れている。JNL T委員会や光天連の観測装置WGの最も重要な課題であり、具体的議論を始めなければならない。

同時に多くの人やグループも具体的に何をしていくべきか考えていく必要がある。

\*各大学で物を作っていき体制が若手育成の重要な課題である。

\*しかし観測装置を作っても取り付ける望遠鏡がない。それぞれの機関で天文教育を進めるにはどのような物が必要なのかを議論して欲しい。

##### 国際学術研究について

\*昨年度の申請時に5-6名の小さなグループに分けて申請したフィロソフィーが理解できない

\*大きなグループにして少数の応募にするか、多くの小さなグループが独自に応募するか、時々文部省の係官によって様子が違うので、方針が立てにくい。

\*応募段階で観測申込が通るか、否かわからないという天文の特殊事情は文部省でも理解されている。



1989年度会務報告(浜部)

1. 総会、懇談会

第12回 総会	1989年 5月16日	東京大学山上会館	40名
懇談会	1989年10月17日	宗像ユリックス	約25名

2. 運営委員会

第53回 運営委員会	1989年 5月16日	東京大学山上会館	18名
第54回 運営委員会	1989年 6月17日	東京大学天文学教室	14名
第55回 運営委員会	1989年10月17日	宗像ユリックス	11名
第56回 運営委員会	1990年 4月 7日	東京大学天文学教室	17名

3. ユーザーズコミッティ会合

ユーザーズコミッティ会合	1989年10月18日	宗像ユリックス	6名
--------------	-------------	---------	----

4. シンポジウム・ワークショップ(WS)

観測天文学シンポジウム --- 大型光学赤外線望遠鏡の目指す天文学 ---	1990年 1月9-10日	日本学術会議	205名
光天連シンポジウム	1990年 1月11日	国立天文台	50名
データ解析WG会合	1989年 5月17日	東京大学山上会館	9名
データ解析WG会合	1989年 8月24日	東京大学山上会館	10名
データ解析WG会合(WS)	1990年 1月12日	国立天文台	15名
望遠鏡WG			
干渉計スペックル観測装置WS	1989年10月28-29日	北軽井沢駿台天文台	15名
体制WG全体会議	1990年 1月10日	青山健保会館	12名

5. その他(関連行事)

天文学に関する技術シンポジウム	1989年 8月21-22日	東京大学総合図書館	68名
シュミットシンポジウム	1989年 8月22-23日	同上	65名
岡山・堂平ユーザーズミーティング	1989年 8月23-24日	同上	68名
大型光学赤外線望遠鏡による 太陽系科学ワークショップ	1989年 8月8-9日	国立天文台	69名

6. 会報等

会報 No. 53 (28頁; 表紙を含む)	1989年 6月26日		
会報 No. 54 (24頁; 表紙を含む)	1989年10月 1日		
会報 No. 55 (48頁; 表紙を含む)	1990年 2月 1日		
会報 No. 56 (24頁; 表紙を含む)	1990年 4月23日		
会員名簿	1990年 2月 1日		
データ解析WG資料集『データ解析・データベース --- 現状と展望 ---』	1989年11月		
JNLTパンフレット	1989年12月		

1989年度光天連会計報告(1990年5月7日現在)

1. 収入

前年度繰越				15,769円
雑収入				231円
会費				494,000円
内訳	86年度分会費	一般	1名、学生	1名
	87年度分会費	一般	1名、学生	1名
	88年度分会費	一般	12名、学生	2名
	89年度分会費	一般	205名、学生	36名
	90年度分会費(前納)	一般	7名、学生	2名
普通預金利息				672円
収入合計				<u>510,672円</u>

2. 支出

印刷費				270,060円
内訳	会報 No. 53		57,680円	
	会報 No. 54		49,440円	
	会報 No. 55		90,640円	
	会報 No. 56		24,000円	
	JNLTパンフレット		48,300円	
郵送料等				139,506円
会合費				5,030円
振替払込料加入者負担				240円
支出合計				<u>414,836円</u>

3. 残高

95,836円

4. 会費納入状況

1989年度会費	前年度までに納入	2名
	当年度納入	241名
	未納	28名

(光天連事務局)

# JNL T計画進捗状況 (国立天文台 JNL T/WG)

## 概算要求

設置調査費が1990年度予算案政府原案に盛り込まれた。

## 体制整備

JNL T委員会の国立天文台運営協議員会専門委員会レベル化が決まった。  
海部・唐牛・市川・林各氏が着任。

## 観測天文学シンポジウム

1月に日本学術会議天文学研究連絡委員会との共同主催で開催。

## 技術検討

JNL T/WGは第253回、技術検討会は第34回までを開催した。  
地盤調査により地盤の剛性などを測定し、ドーム構造の設計が可能となった。  
能動光学方式が実現可能であることが実験により実証された。  
能動光学の応用によりナスマス焦点位置を最適化することができた。  
2重トップリングと各種副鏡モジュールを用いることで、トップリング全体を交換しないで副鏡を交換できるようになった。  
ドーム内部に風を導くことによりシーイングを向上させるようドーム構造の見直しを行っている。  
最適なドーム構造を評価するための水流実験を企画している。

## 装置開発

PtSiの2次元赤外カメラを製作し評価した。  
汎用CCDコントローラの製作が進んだ。  
アダプティブ光学への取りくみを始めた。  
他に赤外分光器、ファイバー基礎実験、などが進められている。

## 1990年度の主な事項

1991年度着手を目指した概算要求を行う。(主鏡、構造に着手し推進本部を設置する。)  
観測装置計画を重点的に進める。  
建設候補地に関する環境アセスメント資料作成。

(文責：家)

1990年5月9日

1990年度 活動方針

光天連運営委員会

## 1. 活動の目標

JNL T設置調査費が認められ、今後JNL T建設からその運用に至る実際の作業をとまなう活動を光天連に期待される段階になってきた。一方、国立天文台は設立後3年目を迎えて、日本の光学赤外線天文学分野の強化発展のかなめとしての役割を果たす共同利用運営体制を、実際の経験を積み重ねながら整えて行こうとしている。このような状況のもとで、本年度は次のような活動を重点として進める。

- 1) JNL T観測装置の開発計画策定に取り組む。
- 2) JNL Tを用いた観測的研究の課題について検討を深める。
- 3) 国立天文台の共同利用体制充実と各大学の天文学教育研究体制強化を支援する。
- 4) 国際的な協力関係・共同研究を進めるための努力をする。
- 5) 光学赤外線天文学のPR活動を行なう。

## 2. 活動計画

イ) 総会、運営委員会の開催及び会報発行

ロ) シンポジウム、研究会等の開催

(1) 光天連が主体で行なうもの

A) [JNL T観測装置ワークショップ]

B) [光天連シンポジウム]

C) 各種ワークショップ：各WGが計画組織するもの

(2) 関連グループとの協力で行なうもの

A) 「光赤外ユーザーズミーティング」(仮称)

B) 「銀河観測による宇宙論」ワークショップ

C) 「技術シンポジウム」

ハ) ワーキンググループの活動

(1) JNL T観測装置の開発計画策定：観測装置WG

(2) データ解析体制：⇒データ解析WG

(3) その他の課題：運営委で逐次とりあげ、WG等での検討をすすめる。

① JNL Tの運用体制

② 大学における教育研究(研究施設と若手養成)

③ 光学赤外線分野の将来計画

④ 国際協力・共同研究の推進

⑤ 国内望遠鏡・UH望遠鏡の有効利用

ニ) PR活動

周辺及び関連分野へのPR

### Ⅲ. 第58回光天連運営委員会報告

日時 : 1990年6月2日 午後1時半～5時半  
場所 : 国立天文台三鷹会議室  
出席者 : 舞原、小平、市川(隆)、岡村、谷口、渡部、家、平田(欠席 海部、若松)

#### 1. 報告

##### 1) 運営委・ワーキンググループ等の旅費(事務局市川)

科研費の総合研究、一般研究の代表者に旅費の補助を依頼し、今年度の活動に必要な旅費分はほぼ確保できる見通しである。

##### 2) JNL T関連の報告(小平、家)

- a) 平成3年度概算要求にむけて準備を進めている。他の大型プロジェクトとの競合もあるが、文部省としてもJNL Tを最優先して考えている。口径を8mにする方向で技術的検討を行っている。
- b) JNL Tニュースは6月中旬に創刊号を出す予定。シンボルマークは約40件の案が集まっていて、現在選考中。

##### 3) 岡山観測プログラム(岡村)

今期の応募倍率は約1.6倍であった(応募夜数/割当可能夜数)。特に暗夜の倍率は高い。レフェリによる点数とプログラム小委の調整の結果最終的に割当を決めた。そのプロセス等については小委員長(西村)の本会報の記事を参照。

#### 2. 国立天文台委員等の推薦

投票結果(後に掲載)に従って以下のように被推薦者を決めた。実際には運営協議員は専門委員会に、その他の委員は台長に推薦を行う。

- |              |                           |
|--------------|---------------------------|
| 1) 運営協議員     | : 奥田(治)、松本(敏)、杉本(大)、小暮、若松 |
| 2) JNL T委    | : 舞原、岡村、市川(隆)、谷口          |
| 3) 光赤外・太陽専門委 | : 若松、辻、平田、斎藤(衛)           |
| 4) 理論・共通専門委  | : 市川(隆)、竹内、定金             |
| 5) 総合計画委     | : 岡村、定金、谷口、長田             |
| 6) 研究交流委     | : 松本(敏)、大谷、石田(恵)          |
| 7) プログラム小委   | : 小倉、定金、平田                |
| 8) 装置開発小委    | : 大谷、田中(済)、野口(邦)          |
| 9) 計算機小委     | : 田村、濱部                   |

#### 調整についての説明

- \* 運営協議員: 投票結果に従って5名を順位をつけて推薦。5名としたのは、国立大学以外のメンバーを入れるべきであること、又現役を退いた人の場合大学の教授会レベルの運営協議員会メンバーに適任かどうか判断が難しいこと、等を考慮したため、その意味において、天文台側には順位4、5位はフレキシブルに考えてもらうこととする。
- \* JNL T委: 基本的には投票数に従って被推薦者を決めていったが、若松氏は重複が多くなるので、運営委の判断で、光赤外・太陽専門委の方に推薦した。
- \* 光赤外・太陽専門委: 投票の上位3名がJNL T委に入ることになったので、下位から繰り上げて4名を推薦した。

\* その他の委員会: 運営委で候補者をリストし、その中から推薦者を決めた。時間的には必ずしも今回の運営委で決める必要はないとの意見もあったが、上の各委員会等の推薦との関連が深いので、今回決めておくのが適当と判断した。

\* JNL T委と光赤外・太陽専門委の差がほとんど投票に現れなかったが、投票の指針となる考え方を運営委として議論しておいて、それを会員の投票の参考にしてもらおう方がより実情にあった推薦ができたのではないかと反省があった。

#### 3. ワーキンググループの活動計画

##### 1) データ解析WG

世話人を市川(隆)とし、WGメンバーに土居、高遠、高見、市川(伸)、関口、西村を決めた。検討課題としては、①JNL Tで得られるデータの解析システム、②ハブル望遠鏡のアーカイバルデータ処理、③光赤外データの解析におけるスーパーコンピュータの位置づけを2年間程度の期間で検討していく。詳しくは活動計画書(別掲)参照。

##### 2) 観測装置WG

今年は具体的なチーム作りから始めて、JNL Tの予算計画との関連でタイムテーブルを含めた観測装置開発態勢の確立を図る。さし当り6月8、9日の2日間観測装置開発に関する何らかの提案を考えているグループの人達に集まってもらい、開発計画、開発態勢についての今年最初の議論を行いたいと考えている(世話人: 海部、舞原)。この集りで、幾つかのチームをスタートさせ、各チームの代表となるべき人で秋から冬にかけて予定している本ワークショップの世話人を構成したい。

#### 4. その他

##### 1) 大学における教育研究(舞原)

この問題を今後運営委として十分議論を深めることの必要性が認識された。大きくわけて、イ) 大学における研究施設・設備の充実、ロ) 大学院教育の充実という2つの点がある。各大学ではそれぞれ具体的に計画や要求が検討されていると考えられるので、それらを運営委では把握しながら議論を進めたい。大学院教育の問題と密接に関連して、国立天文台の総合大学院構想に関する意見交換を行った。幾つかの意見を以下に掲げる。

○ 共同利用研究所が独立大学院をもっとすれば、大学でカバーできない研究分野、例えば、大型装置や特殊装置の開発的研究、または地球回転や時間に関する分野、に限られるべきである。

○ しかし、光赤外天文学の観測的研究者の養成という点で、現在大学は、若手研究者養成を十分組織的に行っているとはいえない。その意味から国立天文台がこの分野で独立大学院を設けることには、十分justificationが存在している。

○ 国立の共同利用研は、一種の中核研であり人的、予算的、設備等で大学の現状と比べて、相対的には圧倒的優位に立っているため独立大学院を持つことにより自己増殖機能が備わるようになるのは危険である。

##### 2) 将来計画(渡部)

ポストJNL T計画の必要性、何を指し、どんな計画をイメージしていくかについて渡部委員の問題提起に対し、短時間の意見交換を行った。(別掲参照)



国立天文台「運営協議員」「JNL T委員」「光赤外・太陽専門委員」  
推薦候補者選挙結果

	投票者数	有効投票数	無効投票数	白票
運営協議委員選挙	87	156	7	11
JNL T委員選挙	87	156	11	7
光赤外・太陽専門委員選挙	86	162	6	4

上位得票者（5票以上）

運営協議委員選挙	JNL T委員選挙	光赤外・太陽専門委員選挙
奥田治之 23票	舞原俊憲 27票	岡村定矩 24票
松本敏雄 17	岡村定矩 25	舞原俊憲 23
杉本大一郎 16	若松謙一 21	若松謙一 21
小暮智一 14	市川隆 11	辻 隆 10
若松謙一 12	谷口義明 9	谷口義明 6
竹内 峯 8	松本敏雄 8	平田龍幸 6
石田恵一 7	定金晃三 5	斉藤衛 6
舞原俊憲 6	大谷浩 5	市川隆 5
斉藤衛 6	奥田治之 5	松本敏雄 5
藤本光昭 5		尾崎洋二 5
田原博人 5		牧田 貢 5

アンダーラインは運営委員会での調整の結果、各委員に推薦された人

第1回  
光・赤外ユーザーズミーティング

—お知らせ—

日時：1990年8月22日(13時半)～24日(16時)  
場所：国立天文台(三鷹)講義室

昨年度までの「シュミットシンポジウム」「岡山・堂平ユーザーズミーティング」を合同して、新たに上記の研究会を開催することになりました。木曾観測所、岡山天体物理観測所、堂平観測所などで得られた研究成果を持ち寄って、報告、研究交流、討論等を行います。今年度は岡山観測所開設30周年の年にあたりますので、特別企画を計画しています。また、ハワイ大学2.2m望遠鏡、宇宙研1.3m、通総研1.5m望遠鏡などでの成果、JNL Tの状況、光天連の活動なども報告される予定です。

詳しくは事務局までお問い合わせください。主な研究機関には既に案内状を発送しました。

主催 国立天文台、東大・理・天文教育研究センター  
後援 光学天文連絡会

データ解析ワーキンググループ

—活動計画—

各教育・研究機関の努力とデータ解析WGの活動の結果、多数の機関に懸案であったSUNワークスデーシヨンのIRAFデータ解析システムが導入され、全国的に導入の段階に入っている。また、WGの枠を越えてIRAF担当者会が発足し、現在、当国を支援し、昨年度まで残された課題に取り組み、最も重要な課題であるJNL Tのデータ解析システムの将来計画の立案に対する取り組みを開始します。特に、後者は世界一の解析システムであるとの認識も必要です。

「望遠鏡、観測装置、データ解析システムは現代の観測天文学を支える三本柱である。半導体技術や光制御技術の発展に伴い、天文観測で得られるデータ量は近年極めて複雑な組み合わせ、その量は加速度的に増大している。観測装置とデータ解析システムは、莫大な情報の中から見せ、観測終了から最終データを得るまでの時間を可能な限り短縮し、必要な時に必要な形でデータを抽出し、必要な情報に絞り込んでいく必要がある。天文研究者の要求に従って必要な情報を抽出し、必要な形でデータを抽出し、必要な情報に絞り込んでいく必要がある。天文研究者の要求に従って必要な情報を抽出し、必要な形でデータを抽出し、必要な情報に絞り込んでいく必要がある。」(「データ解析・データベース現状と展望」より)

観測機器WGの本格的な活動が始まった現在、同時進行でデータ解析システムの検討も進めていかなければなりません。そこで、今年からこのWGで積極的に取り上げる課題は

- (1) JNL Tで得られるデータの質と量の分析と、それに見合う最適なデータ解析システム(ハードウェア、ソフトウェア)の検討と将来計画の立案。

です。この課題は十分時間をかけて検討する必要があります。また技術的な側面が強いので、現在、技術開発やデータ解析に携わっている、赤外線・光分野の若い人を中心にしてメンバーを編成します。結論を急がず、十分な時間をかける必要がありますので第一次報告のための検討期間は2年を予定しています。今年度は特にJNL Tで得られるデータの質と量の分析と、ハードウェアに関するデータ解析システムの検討を行う予定です。また、早急に検討を進めていく課題として

- (2) ハッブル望遠鏡のアーカイバルデータ処理体制
- (3) 光赤外線関係のデータ解析に対するスーパーコンピュータの位置づけワークステーションとの役割分担。

前者の課題に対する国立天文台の取り組みについては本会報に西村氏の記事があります。後者については理論グループやVLBIグループが国立天文台三鷹にスーパーコンピュータの導入を計画していますが、光赤外線グループとしてはどう取り組むかの検討が依頼されています。しかしこの問題はJNL Tデータ解析システム全体の中で位置づける必要があります。従って将来計画の中に位置づけて検討をしていきます。また一般的な問題として

- (4) 国立天文台のデータ解析センターの将来計画
- (5) 国立天文台のデータ解析体制のあり方と全国研究者に対する支援体制。
- (6) データ解析の全国的体制、ネットワークシステムの検討

があります。(4)(5)は運営委員会や全国の会員によって議論を深めていくべき問題です。このWGでは必要に応じてそのための技術的検討、資料の収集と整理等を行います。(6)についてはIRAF担当者会が積極的に進めていくことが期待されますので、協力して課題に取り組んでいきたいと思います。

メンバー 土居守、高遠徳尚、関口真木、高見英樹、市川伸一、市川隆、西村史朗(文責)、世話人 市川隆



## 将来計画に関するメモ

1990年6月2日 光天連運営委員会にて 渡部潤一（国立天文台）

### ポストJNL T計画の必要性

光天連は「JNL T」の建設を推進するための団体であり、JNL T完成の暁には、その存在意義を失い、解散してもよい。といった極端な光天連の意義づけもあるかも知れません。しかし、われわれにとって、JNL Tが果して最終兵器でしょうか？ 少なくとも私は、そうだとは思いません。JNL Tの完成後に、すぐに次の計画を走らせる準備を怠らない必要があると思います。

### ポストJNL T計画で何を指すか？

光天連としてポストJNL T計画は何を考えるべきか？ どんなサイエンスを目指すべきか？ この質問に答えるのは、かなり難しい側面があります。しかし、時代と共に光学・赤外線に重きをおいた研究者の研究対象は少しずつ変わっていくとしても、観測限界に挑むという科学プロジェクトの方向は変わらないでしょう。問題は突破すべき観測限界は何かです。ここでは、突破すべき観測限界と、それによって考えられるプロジェクトの方向を表にしてみました。ポストJNL T計画は、地上の望遠鏡の性能向上へ向かうか、あるいはスペースへ向かうか、の二つの大きな選択があるでしょう。われわれは光天連の存在意義を考えつつ、近い将来どちらを選択するかの決断を迫られるはずで

突破すべき観測限界 (JNL T)	ポストJNL Tプロジェクトの方向
空間分解能 0.1 秒角	スペース
集光力 7.5 m	地上望遠鏡大口径化、マルチミラー化
微光天体観測能力	?
観測時間の制約	JNL Tクラスの複数化
干渉観測	JNL Tの複数化
観測波長の拡張	スペース、極地

### 1. 地上

JNL Tクラスの望遠鏡の複数化 ——— ESO: VLTプロジェクト  
 JNL Tを超える単一望遠鏡 ——— マルチミラー化  
 マウナケア山頂？  
 ハレアカラ山頂（マウイ島）？  
 アジア連合望遠鏡（台湾、中国）？

### 2. スペース

軌道望遠鏡プロジェクト ———— ポストHST  
 特色のある赤外線望遠鏡？ 紫外線望遠鏡？

### 3. ムーン

月面望遠鏡プロジェクト ———— NASA, Arizona  
 多波長プロジェクト, 国際協力？  
 日本では基地に関して検討開始（大手建設企業, 未来工学研究所等）

## IV. 岡山・堂平観測プログラム小委員会よりの報告

（小委員会の沿革、1990年前期までのプログラム編成については本会報55号を参照されたい。）

1990年後期の観測プログラム編成のための小委員会は、1990年5月17日午前10時30分から午後5時まで国立天文台（三鷹）で開かれた。最初にこれまでのプログラム編成について総括を行った。個別的には2・3のコメントがあった。1）昼間観測で、シェアの相手との間で、観測・データ転送の時間割振りや装置のセッティング変更の問題点があり、単独で昼夜連続観測を行う方が有効であることが分った。2）新カセグレン分光器の使用申込みがふえ、分光器およびTI CCDについて改修を進めているが、来期からは観測所備付けの装置とする。3）ニュートンCCD観測は干渉フィルターによる狭帯域撮像も本格的使用に入り課題数が増加した。

1990年後期の申込み課題数は、188cm 37, 91cm 10, 太陽クーデ17であった。後期の予定としては、188cmドームスリットの修理を行うため、9月の整備期間を3週間とし、共同利用可能夜数は150夜となった。一方188cm望遠鏡は複数回あるいは長期間の要求があり、申込み夜数の合計は255夜と共同利用可能夜数の約1.7倍となった。スクリーニング制の基本的な考えは、望遠鏡・設備を有効利用することであり、レフェリー評価を考慮しながら、平均5~6夜を確保するよう調整することにあることを再確認した。個々の申込みについて議論し、結局レフェリーの評価C（時間があれば割付ける）以下が多かった9課題については、今期での採択を見送った。その結果1課題当たりの平均は5.6夜となった。91cmおよび太陽クーデについては、従来通りのプログラム編成を行うこととした。

小委員会の後、具体的な日程の割付け作業に入り、小委員会および光学赤外天文・太陽専門委員会の委員の了承を得た上で確定し、6月上旬に各観測者に発送した。

今後の日程は、9月始め1991年前期の公募開始、10月上旬締め切り、レフェリーへ発送、11月中旬小委員会開催の予定である。

前原委員から岡山天体物理観測所の現況について報告があった。目下特別経費をあてて、91cm用偏光撮像装置を製作している。まずワークステーションの設置と立ち上げ・調整を行っているが、今後ユーザ（特に若手研究者）の協力を得て、有効なデータ処理システムを構築して行きたい。菊池から堂平観測所の現況について報告があり、共同利用期間（10月~3月）は無事終了した。91cm望遠鏡はほとんどがポラリメータであり、50cmシュミットは申込みがなかった。特別経費の援助を受けて、偏光分光装置の立ち上げを進めている。現地勤務の技術系職員2名が入院・加療などで健康状態を悪化させている。

以上今回のプログラム小委員会で議論されていることの一部を報告したが、これまでのプログラム編成について、また今後の方針について忌憚のない意見・批判をお寄せいただきたい。

国立天文台 西村史朗

## 第6回理論・共通専門委員会議事メモ

日時： 1990年5月24日 13:00-16:00

場所： 国立天文台会議室

出席者： 池内(委員長)、岡本、木下、高原、辻、中村、西村、平山(企画調整主幹)、藤本

### 報告：

- 1) 平成3年度概算要求の基本方針について  
平山企画調整主幹より全般的な説明があった。天文学データ解析計算センター関係としては教育職の増員、HSTデータ解析による高分解能観測経費、スーパー・コンピュータ経費等の要求が含まれている。
- 2) 平成2年度共同利用関連経費配分案について  
池内委員長より研究交流委員会で決定された配分案が報告された。
- 3) 天文学データ解析計算センターの現状報告と当面の計画について  
西村センター長より1989年度決算及び以下の報告があった：  
a) 夜間運用は順調に稼働し計算機利用時間が大幅に伸びた。  
b) IRAP, TEX等ソフトウェアの導入を行った。  
c) 構内LANとMシリーズの接続、東大理学国際ネットへの接続等ネットワークの整備が進んだ。  
d) ユーザ利用成果報告、センター広報資料を含むセンター年報(仮称)の発行を準備中である。  
e) 1990年度にはWS(2台)、各種ディスク、入出力装置等の増設を行う予定である。  
f) 1989年度利用者統計がまとまった。例えばCPU稼働率は93%である。

### 議事：

- 1) 天文学データ解析計算センターの共同利用について  
a) 1990年度前期計算機共同利用旅費の割当について  
西村センター長より、三鷹14件、野辺山18件、水沢3件(総額194.5万円)の応募にたいし計算機共同利用小委員会で議論した原則に基き各々6、18、0件(総額80.9万円)の配分を行う案が示され、審議の結果承認された。  
b) 次期計算機システム計画について  
西村センター長より計算機共同利用小委員会で審議した結果、1991年度の計算機更新の概算要求では、レンタル料の増額を要求し、CPUの高速化、分散処理及び大量データ処理の機能を大幅に強化する案がまとまった旨報告された。また、これとは別に理論系からの要求として、JNLT及びVSOP計画からの要求も組み込んで、スーパー・コンピュータを要求していく案が示され、両案を一体として推進していくことが提案された。これらについて意見交換を行い、基本的にはこれらの方針を承認した。
- 2) 運営協議員の推薦について  
理論系からの候補者は、理論天文学懇談会における投票の結果に基き、杉本大一郎、中村卓史、佐藤勝彦、高原文郎の4氏を推薦することに決定した。また、共通(計算機関係)を代表する候補者は台内協議員の中で考慮されるよう申し入れることとした。
- 3) 国立天文台研究員制度について  
位置力学系、理論系で研究員制度の導入が検討されているが、天文台全体で考える方がよいとする意見もあり、これについて意見交換を行った。
- 4) その他  
池内委員長より以下の報告があった：  
a) 台長任期は4年、再任は2年とし、就任時の年齢は原則として63才以下とする案が固まりつつある。  
b) 大学院教育については客員大講座を推進していくが、総合研究大学院についても天文台として検討を始めることとした。  
c) 外国人客員、国内客員、外国人研究員の推薦をお願いする(8月31日締切)。

(文責：辻)

## VI. OSDAについて

小平桂一(国立天文台)

### 1. 背景と経緯

OSDA(Operation and Site Development Agreement; 運用開発協定書)は、マウナケア地域への望遠鏡設置に当たって、相互に予め最大限合意すべき土地利用の条件と望遠鏡の運用条件を定めるものである(本会報 頁、OSDAの目次参照)。マウナケア山頂一帯はハワイ州の州有地で、自然保護地域に指定されている。地元市民の信仰の対象であり、憩の場であり、スキーや狩猟の場であり、また歴史的遺跡や地質遺跡に富み、高山性の動植物が保存されている。このような地帯を、国際的に天文観測条件が優れているからという理由だけで、何の直接的な見返りもなく、地元の権益を譲渡して、望遠鏡建設のための開発を許すというのは、市民感情や行政の面で、決して容易なことではない。アリゾナ州のグラハム山の例では、環境保全の論理が前面に出て、難行している。

自国の望遠鏡ばかりでなく、親しい国々とか、いわんや言語、文化の異なる国々の望遠鏡の設置にも道を開くには、ハワイ大学天文研究所の初代所長J.ジェフリースの並々ならぬ情熱と、それを支えたハワイ大学の関係者や州の指導的な立場にある人々の多大な努力が不可欠であった。州議会は天文観測の意義を認めて、山頂一帯をハワイ大学に貸与し、天文観測のために他研究機関に再貸与して利用させる権限と責任までも付与する法律を通じた。さらには、1980年代の新しい望遠鏡の建設構想が浮上すると、ハワイ大学関係者が奔走し、マウナケア科学保護地域総合開発計画を策定してもらうまでに漕ぎつけた。これによって、今世紀中に13台までの設置が認められ、基本的に守るべき開発条件が規定された。また州行政当局も山頂までの州道の基本整備、そのための融資等々、大巾なバックアップを行って、今日のマウナケア国際観測所の基盤が形成されてきた。

このような歴史的経過があって、OSDAの内容も時と共に少しずつ移り変わり、また相手方と地元との相対関係において個別的な違いが生じた。ハワイ大学は、これまでの努力や、これからも必要なインタフェースとしての多大な努力に見合う、できるだけスムーズな運用体制と学術上の見返りを期待している。JNLTのOSDAは、J.ジェフリース所長の時代に、上記のような歴史的流れと状況の下に、既存の諸OSDAを下敷にして、ハワイ側より0次案が提示された。「もしも日本が設置しようとするなら、こんなことがありますよ」という意味の例であった。1982/3年頃のことで、まだ光天連では国外か国内か、3.5mか5mか、などの議論に追われ、国立天文台ができることも予定になかった。天文研連でJNLT計画が認められ、東京天文台でも調査を開始した1985年頃には、今のOSDAの原型を作ることになって協議に入ったが、まだ判らないことばかりであった。協議には小平が当り、適宜天文研連や東京天文台の将来計画委員会に報告を行った。

### 2. 今のOSDA案

一応の形が整ったのが1986年で早速に寿岳さんを中心にしたTask Forceが検討を行った。その結果や、京大グループのその後の検討結果を踏まえて改良作業を続けてきたが、相手方がハワイ大学であるのに対し、日本側ではJNLT計画そのものが公式に認可されていない状況で、交渉責任の主体は必ずしも明確ではなかった。本格的な対応が可能になったのは、設置調査費の見込みが付き始めた昨年くらいからで、文部省の法規担当者や国立天文台の事務責任者も加わって検討を行っている。ハワイ大学では天文研究所所長のD.ホール教授、同補佐のL.コーヴィ教授、事務長のロングフィールド氏が検討に当たっている。ハワイ側の署名に加わる学長、副学長、大学弁護士(日本にはこの制度はない)は、このレベルの内容の検討には全く関与していないと思われる。OSDA中の土地開発条件と分担金、望遠鏡時間の文与などが基本的な協定項目であるのに対して、運用上、科学上の協力内容はかなりソフトな、研究者レベルの合意事項であってハワイ大学側が日本に無理やり



に押しつけるというような性質ではない。ハワイ大学側は十分に柔軟で日本の研究者と密接な協力関係を発展させたいという未来志向をもっている。しいて言えば、日本側の対応がおこなわれているために、確定できていない部分が残っている。

諸委員会の形態はその一例である。国立天文台では「JNL T推進本部」(会報No.56, p.15参照)を要求していく予定である。またJNL T委員会を専門委員会レベルに格上げし、JNL Tにかかわる共同開発・運用体制を整備しようとしている。国内観測所については光赤外太陽専門委員会の下にプログラム小委と装置開発小委が活動していて、JNL Tについても将来は似た組織が作られるものと予想されるが、未定である。文案の穴埋め問題で未定のために埋められないところは、「未定のため」と入れてもらってある。ハワイがホスト国なので他の10台近い望遠鏡にならって英語を原本としているが、その英文表現については、必要とあればかなり詳しい協議をしている。装置開発の項目や、マスメディアへの対応の項目では、相当なやりとりがあった。昨年からは改訂交渉に古在会長も加わっている。何度か改訂をしてきているが、いずれも日本側の希望によって改訂をしてきているのであって、ハワイ側はその文書管理を行っている。経過から見ると、日本の実情を理解してもらい、それに即した方向に改訂してきたが、お互いに不信感を抱いたことはなく、ハワイ側も誠意をもって対応してくれている。

OSDAは前述のように、望遠鏡建設をめぐって地元の収益保護のために必要最小限度を定めるという基本的性格があるので、JNL Tの設置以外に一般的に科学交流という観点から、日本側の要望を書き加えるのにはあまり向いていない。それは又別の科学交流の覚え書きを作ることになるのであろう。UH2.2mの利用もこのカテゴリーに入ると理解されている。

### 3. これからの課題

OSDAの成案ができれば、国立天文台とハワイ大学との間で合意締結することになる。改訂にかかわってきた当事者としては基本的なことはクリアされていて、その間に培われた信頼関係に基づいて協力していけば、実際面ではお互いに十分に弾力的な運用ができると感じている。しかし成案を得ることが建設の前提となるので、光天連としては頑張って検討する必要があるのは、誠に能丸氏のご指摘(会報No.55, p.36)のとうりである。今年は設置調査費も認められたので、能丸氏がやられたような全体的な位置づけと共にキメ細かい検討を光天連でも行い、更に改訂が必要ならば、改訂案のとりまとめをして9月の次回協議予定に合わせたいと思います。別記によりOSDA検討会の開催を準備をいたします。OSDAの検討会に参加したい方は国立天文台JNL T準備室までお申し越しください。今後のサーキュラーとOSDAのコピーをお送りいたします。

## JNL T運用体制 と OSDA検討会

日 時	1990年7月17日(火)11時~17時 予定
場 所	国立天文台三鷹講義室
内 容	OSDA案の説明及び検討

参加希望者は国立天文台JNL T準備室までお申し込み下さい(様式自由)  
FAX 0422-41-3608

## 目次

前文	-----	4
I. 用語の定義	-----	4
II. 施設の所在地	-----	6
III. NAOJとUHの相互連絡	-----	6
IV. UHの責任	-----	6
A. 施設への接続道路		
B. マウナケア観測所の管理		
V. NAOJの責任	-----	7
A. 施設の設計、製造、搬入、建設、運用		
B. NAOJ分岐道路		
C. 電話とデータ通信用導管と回線		
VI. NAOJとUHが共同分担する責任	-----	7
A. 研究環境		
1. UH		
2. NAOJ		
B. 許可申請		
1. UH		
2. NAOJ		
C. 通行権		
1. UH		
2. NAOJ		
D. マウナケア観測所の他の天文学施設と共有される基幹施設の整備		
1. 商用電力とデータ通信の導管と回線、道路補修		
2. 中間施設の拡張		
3. 案内所の拡張		
4. NAOJの鏡蒸着装置		
5. マウナケア観測所の他の基幹施設の整備		
E. 基地支援施設		
1. UH		
2. NAOJ		
F. 運用と保守		
1. UH		
2. NAOJ		
VII. NAOJの権利の代行と責任の委託	-----	12
VIII. 権利の譲渡	-----	12
IX. 科学上の協力	-----	12
A. UHによる施設の利用		
B. JNL Tの観測機器開発へのUHの参加		
C. UHのJNL T委員会組織への参加		
D. 画像の営利的利用		
E. 施設名の引用		
F. アメリカおよび日本の報道関係者との交渉		
G. UH-マノアの学術プログラムとの交流		

X.	保険/賠償責任-----	15
XI.	弁護士の費用-----	15
XII.	訴訟手続きの代行-----	15
XIII.	適用される法律、分譲性-----	16
XIV.	このOSDAの修正-----	16
XV.	このOSDAの有効期間-----	16
XVI.	このOSDAの再交渉または期間延長-----	16
XVII.	終了-----	16
XVIII.	終了時における施設の処分-----	16

運用・用地開発協定付属文書A:

NAOJとハワイ大学間の転賃借および非専用地役権協定

添付書類A. 一般賃借協定 S-4191

添付書類B. 転賃借への同意

添付書類C. 賃借される土地

添付書類D. 建設物の記述

運用・用地開発協定付属文書B: 分岐道路

運用・用地開発協定付属文書C: W. M. Keck天文台から先のJNL T用地

## Ⅶ. HSTアーカイバルデータセンターについて

### — 国立天文台の現況 —

ハッブルスペースステレスコプ(HST)は1990年5月24日に打ち上げられ、目下軌道上で機器のテストを行っている。順調に進めば、夏には機器開発を担当したGTOの観測が始まり、年末には第1期の公募プログラムが実行されるものと期待されている。もう一年たつと、いよいよアーカイバルデータが出て来る。

わが国にアーカイバルデータセンターを置くとした時に、どれだけ機能を持つべきかについては、既にあちこちに(「超大型天体望遠鏡用新型鏡の研究」東京大学創立百年記念学術研究奨励資金国際共同研究、1983、や「データ解析・データベース 現状と展望」光学天文連絡会、1989)論じてきたが、1)データの入手と頒布、2)ソフトウェアの開発・交換、3)データ解析のためのユーザ支援、4)HSTについてのノウハウの蓄積・伝達、などがある。最後の項目は、プロポーザルの提出支援に始まって、長期的にはHSTへの観測装置の貢献にまで及ぶ。これらの機能を満たすには、最低限5人の研究者が必要であると1983年当時見積もった。しかし国立天文台の現在の人事進展状況では、残念ながらこの数字は実現を期待できないものがある。それならば、最低限の機能だけでも満たすセンターを、可能なだけの人員でもって発足させるべきかどうか、決断すべき時は迫っている。アーカイバルデータセンターなしでもアーカイバルデータによる研究ができないわけではない。個々にST科学研究所からデータを入手することはできる。しかしそれがあるレベル以上になると、こちら側での不便さと、先方でも歓迎されない状況になる。一体アーカイバルデータによる研究がどれくらい行われるのか、見積もるだけの材料はいまのところない。

ソフトウェアについては、1986年からVAX/VMSの上でSDASを移植して試用とプログラムの修正が進められてきたが、UNIXワークステーションが普及している現在、本格的運用はUNIXの上で行われるであろう。ST科学研究所では、SDASから一歩進めてデータ校正なども含めたSTSDASを構築し、間もなく配布される予定である。

ハードウェアに関して、国立天文台では天文学データ解析計算センターにおいて、HSTのデータ解析を推進するために、特別経費を概算要求している(特別経費とは、各施設において共同利用を進めるために要求できるもので、1989年度には岡山・堂平に配分された)。1990年には新規要求の第1順位にあったが、実現しなかった。1991年も引き続き要求している。これが通ると、光ディスク装置を含めて、アーカイバルデータを解析する設備がある程度満たされる。

これからの1年、データ解析WGでは、HSTのデータセンターが検討項目の1つとなる予定である。7月10~11日に国立天文台で開かれるHSTについてのワークショップでも議論される。活発な意見を寄せていただきたい。(文責 西村)



## VIII. JNL T観測装置プレワークショップ報告

1990年6月8日～9日の2日間に亘り、国立天文台で表記のワークショップが、JNL T準備室と光天連の協力で開催された。(出席者は延べ約50人)

1991年度よりJNL T建設がスタートするとして、その3年後より観測装置の設計作業など実際に予算を伴う年次計画がスタートすることになる。したがってJNL T観測装置の具体的計画を確立することは、既に差し迫った課題であり、光天連としても今年度は実行態勢をどう作っていくか詰めることを最重点の目標にしている。

今回のプレワークショップでは、初日まず現在行われつつある光赤外観測装置の開発的な研究のアクティビティの現状をサーベイすることを主とした報告を行ってもらった。

◎CCD開発では、モザイク化による広視野撮像系の開発(関口)、多素子赤外カメラの開発(上野)が報告された。

◎分光器の開発では、光学域の3次元データキューブを実現することを目標にしたスペクトロネブュラグラフ(大谷)、多天体分光器(中桐、唐牛)、および赤外分光器(野口、長田)、イメージングファブリペロ(田中<sub>田中</sub>)等の報告があった。

◎岡山の観測装置計画では、偏光撮像器の開発計画を中心とした報告が行われた(佐々木)

◎アダプティブオプティクスも、赤外(高見)と光(高遠)の意欲的な開発的研究の紹介があった。

2日目には、これまでに提案されてきている幾つかのJNL T標準観測装置の説明が行われ、その後、今後の進め方について総合的な討論を行った。

今年度は秋・冬頃に、JNL T観測装置の本ワークショップを開くことが提案されている。その時には、JNL T用の標準機器のラインナップについても十分見直し検討を行って計画としての詰めを行う必要がある。一方すでにかかなりの数のグループが若い人を含めて現在進めつつある装置開発があり、JNL Tプロジェクトの遂行の中で、それらをサポートし、裾野を強化することも、ある意味でより重要である。そのようなアクティビティの延長として本当にJNL T観測装置開発の態勢ができると言える。

今回の、現状報告を主体としたプレWSの次のステップとして、「今後数年間各機関又はグループでどのような開発計画をもっているか、またJNL T観測装置としてはどのようなものを提案したいか」を公募することになった。公募のやり方と本ワークショップの内容検討のため、7月10日頃に10名程度の世話人会を行うことを決めた。

(文責 舞原)

## IX. 国立天文台内望遠鏡WG会合記録 (13)

- |       |            |  |
|-------|------------|--|
| 第226回 | 1989年7月19日 | NOAO 8m技術報告, 鏡面変形  |
| 第227回 | 7月26日      | マウナケアシーイング測定, 望遠鏡詳細仕様  |
| 第228回 | 8月30日      | 鏡材仕様, 技術検討会準備  |
| 第229回 | 9月6日       | 鏡材仕様, 能動光学によるF比変換  |
| 第230回 | 9月13日      | 鏡材仕様, 能動支持実験   |
| 第231回 | 9月20日      | 技術検討会のまとめ, ツェルニケ関数と波動光学  |
| 第232回 | 9月27日      | 能動支持実験準備, 主鏡支持リング  |
| 第233回 | 10月4日      | 能動支持実験, 主鏡穴の直径, ハワイ報告  |
| 第234回 | 10月11日     | 高分散分光器設計, 主鏡支持点最適化計算   |
| 第235回 | 10月25日     | 能動支持実験, ドーム構造計算, バックフォーカス  |
| 第236回 | 11月1日      | ハワイ調査報告, 望遠鏡詳細仕様   |
| 第237回 | 11月8日      | ドーム仕様と蒸着場所, 能動光学実験中間報告   |
| 第238回 | 11月15日     | 鏡材仕様, マウナケア赤外環境テスト, 望遠鏡詳細仕様, 主鏡振動減衰実験, 天文月報JNL T特集の分担, 制御棟                           |
| 第239回 | 11月22日     | ハワイ報告, ドーム・制御棟   |
| 第240回 | 11月29日     | ドーム関連保守作業, トップリング構造  |
| 第241回 | 12月6日      | ハワイ報告, 仕様書作成検討会報告, 中間リング方式トップリング, 主鏡温度制御   |
| 第242回 | 12月13日     | 詳細仕様検討会報告, 仕様書目次案, 能動支持小検討会報告, ハワイ大学との赤外打合せ会準備, 赤外副鏡支持・交換, イメージローテータ, 副焦点と主鏡変形, 収差補正 |
| 第243回 | 12月20日     | JNL Tとスーパーコンピュータ, 地盤調査とドーム設計   |
| 第244回 | 1990年1月17日 | I f Aとの打合せ会, 詳細仕様検討会報告, マウナケア山頂ドームの放射率測定   |
| 第245回 | 1月24日      | スパイダーによる回折像  |
| 第246回 | 1月31日      | 詳細仕様検討会報告, 蒸着装置  |
| 第247回 | 2月7日       | シミュレータ, 欧州訪問報告, 赤外カメラ, 蒸着槽, 人員要求, 天文月報JNL T特集  |
| 第248回 | 2月21日      | SPIE報告, スターセンサの感度と視野   |
| 第249回 | 2月28日      | SPIE報告, 詳細技術仕様検討, 太陽系天体のガイド系   |
| 第250回 | 3月7日       | 広報体制, 加速度計の購入計画, 学会発表  |
| 第251回 | 3月14日      | 補正光学系のレンズの磨み, ESO/NTT調査報告,   |

原則として水曜日 16:00 - 18:00 (空自)

前回の報告は会報55号p23にある。

## X. 会員異動

### 【新入会】

片駐 宏一 京都大学理学部物理学第二教室  
寒川 尚人 京都大学理学部物理学第二教室

### 【異動】

泉浦 秀行 国立天文台野辺山宇宙電波観測所  
→ 東京学芸大学  
林左 絵子 Joint Astronomical Center  
→ 国立天文台  
鰻目 信三 国立天文台豊川観測所  
→ 国立天文台野辺山 TEL 0267-63-4371  
FAX 0267-98-2506

波木 泰雄 (株) エーピー  
→ クエスト ファーイースト (株)  
〒231 横浜市中区住吉町1-1 第3柳下ビル402  
TEL 045-201-3300  
FAX 045-201-7722

### 【国内・海外出張】

岡崎 敦男 京都大学理学部宇宙物理学教室  
(1990.4.1~1991.3.31)  
山下 卓也 Institute for Astronomy, University of Hawaii  
2680 Woodlawn Drive, Honolulu,  
HI 96822, U.S.A. (1990.5.20 ~1991.3.17)

### 【名簿の訂正】

仲谷 真吾 Gower St., London WC1E 6BT, U.K.  
TEL 071-387-7050  
倉藤 康 三菱電機(株) 鎌倉製作所 機械技術部

### 事務局より

今年度は以下のメンバーが事務局を担当します。句切りの良い10番目の事務局です。つい先日6月8日にJNL Tの設置調査費予算が成立しました。来年度には悲願であった本予算成立が期待されます。いよいよ「JNL T計画」から「JNL T建設」になろうとしています。この大事な時期に事務局を任されることは光栄であるとともに、責任の重大さを感じます。JNL Tの進捗状況を早く、詳しく会員に知っていただけるように努力しますのでどうぞよろしくお願ひします。

事務局長 市川 隆 (一橋大学地学研究室)  
庶務 水野孝雄 (東京学芸大学教育学部地学教室)  
会計 小倉勝男 (國學院大学文学部)

事務局 186東京都国立市中2-1 一橋大学地学研究室  
電話 0425-72-1101 内389  
FAX 0425-71-1893  
e-mail ichikawa@higashi.hit-u.ac.jp